

平成14年度第2回10月30日

演題：サッカー観戦者の調査—W杯の影響を中心に—

演者：高橋 義雄（体育科学部）

サッカーの国家代表チームが世界一をめざすW杯が5月31日から1ヶ月間、日本と韓国のそれぞれ10会場で開催された。W杯は1930年に開始され、今回で17回目、アジアでの開催、そして二カ国での開催ははじめてである。日本は1998年につづき二度目の決勝大会出場となった。今回の大会は売れ残りチケットの問題も発生したが毎日のようにメディアがW杯の話題を取り上げ、日本対ロシア戦のテレビ中継の視聴率は平均で66.1%を記録した。このようにサッカーを普段語らない人までが巻き込まれたW杯であるが、その後のJリーグに与えた影響を9月1日に実施したJリーグ観戦者調査をもとに報告した。

1977年に丸山は、観戦者の調査は未開拓分野としているが、国際的にも Melnick (1989) がそれまでスポーツ観戦者は心理学、社会心理学、社会学の対象としては軽んじられていたと述べている。90年代に入ると社会学の視点から、スポーツ消費者の社会化、好み、暴力・逸脱、そして社会的な凝集力について研究がなされた。心理学・社会心理学の視点では社会認識、帰属意識、ジェンダー役割、アイデンティティ、攻撃性が、また経営学の視点では顧客特性、顧客満足などが調査されている。

日本のサッカー観戦の記録は、日比谷公園グラウンドで開催された全日本選手権（1921）の模様を伝える文章から当時立ち見席であったこと、新聞の情報によって観衆が集まつたことがわかる。全日本選手権第4回大会（1924）には明治神宮外苑競技場が完成し、競技場は「東京名物となり小中学生が団体で引率され観戦。スタンドはお祭りさわぎのようににぎやか。」であったと報告されている。戦後、全日本大会は全国の競技場を転々としていた。1965年に開始された日本サッカーリーグからは毎年の平均入場者数の記録がある。その記録および1993年に開幕したJリーグの平均入場者数の年次変化によれば、W杯イヤーは1970年を除きすべて入場者を増加させていることがわかる。W杯の開催とサッカー観戦者に何らかの関係があることが推測される。2002年では、前年からすでにJリーグの入場者数が増加し、2002年の入場者平均をW杯前後で比較するとW杯後に減少している傾向がみられる。特にJ1クラブは順位に関係なく11クラブが減少している。J2クラブでは、成績の悪い3チームが減少していた。

9月1日調査によれば、W杯に影響を受けて観戦にきた人が4割を占めていた。特に女性は男性に比べ影響を受けたと回答する割合が高い。21.9%は2002年にあって初めてJリーグ観戦に訪れた人で、これら的人は影響を受けたと回答する人は影響がない人に比べ多くなっている。また応援するクラブがない人はある人よりも影響を受けており、観戦経験が浅い人にW杯は影響を及ぼしている傾向が見られる。性別、年齢別（14歳以下、14～19歳、20～24歳……70歳以上）とした場合、ワールドカップを見てサッカーに興味が沸き、Jリーグの試合を観戦に来たという人が「いいえ」に比べ多い傾向が見られる層は、14歳以下男性、15～19歳の男女、35～39歳の女性、40～44歳の女性であった。これらの集団へのインパクトが強かったと考えられる。

こうした結果よりW杯はサッカー観戦行動を誘発していることが推察できるが、流行現象と同様にW杯終了後の廃れる現象が早くも見られ、この退潮現象を食い止めること、さらにこれまでの調査では比較的少数であった年齢集団を観戦行動へと社会化させることはクラブ経営にとって重要と考えられる。今回報告したW杯とサッカー観戦に見られる流行現象は、サッカー以外においても近代社会における身体行動文化とそれを規定する諸構造を検討する上でひとつの情報を与えてくれると考えている。